

昭和16年2月1日 第1種郵便物認可
平成20年3月1日発行 毎月一回 1日発行
俳句雑誌 39 第29巻第3号



俳句雑誌[おき]

通巻450号記念号
3月号

沖
発
行
所

木屋瀬

能村 研三

別の九州

今年のNHKの大河ドラマは「篤姫」でその舞台となる鹿児島が大きな脚光を浴びている。

この鹿児島には、なかなか足を運ぶ機会がない。「沖」の支部が鹿児島にないせいもあるが、学生時代に九州を周遊した折と、二十年前に福永耕二先生の墓参りに北川英子さんと訪れた時の二回だけである。

先月は、「沖」の長崎県支部の句会発足を記念した会と、北九州に文学館関係の視察出張で二回も九州に出かける機会があった。福岡・大分、長崎は「沖」の支部があるので、年に何回かは九州を訪れることがあるが、鹿児島だけは私にとって遠い「別の九州」という思いがある。

先日、「沖」の長崎県支部の会に「河」の同人で鹿児島にお住まいの淵脇護さんが来賓で来てくださった。淵脇さんとは角川春樹さんが主催された有志による奈良での吟行会で一緒にいたことがあり、それ以来親しくさせていただいていたがここでお会いできたことは嬉しかった。

淵脇さんは鹿児島で「かごしま近代文学館」の企画のお仕事に携わっているそうで、お会いした時に一枚

地上絵を統べる位置までいかのぼり

春聯の「福」の逆さ字福よ来い

北九州・木屋瀬宿八句

雨戸線る出隅入隅寒の明

朧夜の古ラジオにゐる伊馬春部

永き日の川筋ものの洞間声

川側の北窓開く船庄屋

料峭やオルガン置かる通し土間

立春大吉土間より見ゆる角座敷

春障子小屋仕立てなるこやの瀬座

春北風遠賀にかつて川かわひらたた船ふね

の企画展のパンフレットをいただいた。その企画は「福永耕二展」で二月の初めから約一か月開催されるという。

そのパンフレットには、「俳句と駆け抜けた日々」というサブタイトルがついていて、耕二先生の二枚の懐かしい写真と〈新宿ははるかなる墓碑鳥渡る〉の句が掲載された「沖」の昭和五十五年二月号の表紙が載っているものであった。

これを見て、何とかこの「福永耕二展」を見たくなり鹿児島へ行きたくなった。このパンフレットを市川学園では私より一級先輩で現在「沖」へ投句している鳥居秀雄さんに見せたところ感激して〈耕二展きみ来ぬのかと雲うつつ〉という句を作られた。二月は私も公私ともに非常に多忙な時期で展覧会を見に行くことは出来ないと思うが、同じ九州にありながら鹿児島は無性に遠いところに来た。

能村 研三



浅春詠

林 翔

登四郎雛

昭和二十年（1945）終戦。いわゆる玉音放送でそれを知ったのは八月十五日であるが、その約三ヶ月後に私は結婚した。敗戦後の日本で生き抜いてゆくには夫婦で力をあわせなければ、と思ったのである。

翌々年の四月二日、女の子が生まれた。「一姫二太郎」とやら、めでたさには酔ったが、実は私は体調を崩していた。お七夜の日、遅くとも今日は赤ん坊に名前を付けなくてはと思いつつ、私は病床に在った。

私は枕許の書物に手を遣った。それは『萬葉集』。パツとあけた夏の歌から名前を選ぼうと思ったのである。そして、パツと開いた夏の初めの方に在った歌はというと、

たまきはる宇智の大野に馬並めて
朝踏ますらむその草深野

であった。この歌から選ぶとすると「朝」しかない。それで「朝子」と

立春の月ほそぼそと昇りけり

北窓を開かむか此の真青空

雑草あらくさとならむ芽吹きぞたしかなる

躑つとむげば擱おさむは幹こや探たづ梅う子め

わが贅は今紅梅の蕾どき

鶯や坂くだり坂のぼる道

飢ゑ猫の恋猫となる乱れ声

若草も躍るや童児追ひ追はれ

春夜更くベーターベンの恋の曲

娘も六十路登四郎雛も古りにけり

命名した。

翌昭和二十三年、初節句が近づくと、高価な雛人形を買ってやることも出来ず、悩んでいた時、登四郎氏が訪ねて来て、手製の内裏雛を贈ってくれた。氏は旧制市川中学校の創立二年目から勤め、四学級しか無い小さな学校で、専門の国語のほかに図画を教えていたというから、絵が巧いことは知っていたが、お雛様まで作るとはと、驚き且つ感謝した。いともささやかな雛壇に内裏様と菱餅と桃の花、それでもわが子の幸を祈ってやることは出来た。

林 翔



蒼茫集



方舟

荒井千佐代

原始星

北川英子

巻貝に砂のぎつしりクリスマス
あけぼの色して初漁の船戻る
柚子の家と呼ばれてをりぬ亡父の家
兎罨かけ一服の長かりし
異人墓のけふは誰が忌か冬堇
彼の冬木世紀末には方舟に

菜根譚

成宮紀代子

老いて夫菜根譚を読みはじむ
ヘルパーの皆半袖に淑気満つ
知る声も混じり寒柝通り過ぐ
大注連の灰の貫禄どんど果つ
兜焼つつく交はり小正月
墓碑に名の多き一族風光る

裸木の総身つまびらかに茜
ふと星の身じろぐ音や氷点下
原始星かくやもダイヤモンドダスト
ふくら雀一羽を許し銀沙灘
大寒の三十三間堂沁みる
根性も根気もしばし日向ぼこ

千代田線

杉本光祥

年迎ふここ東葛に根を下ろし
蓮根切るこの穴何のためならむ
参賀びと千代に八千代に千代田線
埋火や師のよき言葉絶やすまじ
犬吠埼や力漲る初日の出
めらめらと千万画素の初日の出

安房岬 遠藤真砂明

岬神へ願ひ一つの注連作り
父の代の船釘太し鮫鱈吊る
真水あびせて鮫鱈の吊し切り
仁右衛門の荒磯晴るる初渡舟
初東風や波の高さに真砂女句碑
兜煮の濃味も寒の安房岬

沖に一条 千田 敬

南座を筋交ひに来る寒四郎
春こほり竹人形を日が囃し
九十九里の一点に吾初日浴ぶ
寒月光沖に一条迷ひなし
福沸し鳥獸戯画の天目に
手斧目の柱が威張る寒九かな

鷹 匠 湯橋喜美

放鷹を待つ目隠しの鷹猛し
継ぐ子ゐて鷹匠高きころざし

放たれし鷹舞ひ天地いま無音
掘り上げし寒土しばらくして崩る
初雪の牛舎いつきに香をたつる
寡婦にまだ馴れず寒九の水を飲む

初芝居 安居正浩

町の鼠田舎の鼠もクリスマス
日向ぼこ現在完了形の気分
おほらかに生き八方を恵方とす
泥棒の大見得をきる初芝居
夢に母もんぺ姿の若かりし
千年の後も冬田の中に墓

ドルザーク 千田百里

石路咲くや母温かりし井戸水も
白湯を飲むけふ義士の日と思ひつつ
にひ年へ鯉は尾鰭をもて転ず
初茜ドルザークに酔ひながら
パーティーの女人ばかりの寒さかな
海鼠囃む金塊わづか死蔵して

潮鳴集

瘦身

中島あきら

臘梅を嗅ぐ瘦身の透けるまで
風三日裸木瘤を太らせつ
白息の働く太さ長さかな
苛めつ子苛められつ子雪ばんば
山茶花散る地に慟哭を描くやうに

四次元

栃内和江

凍蝶のいま四次元の翹づかひ
あかときの湖大いなる淑気かな
たをたをと水面に風の筆はじめ
発心のいよいよ青き雪ばんば
雪原に日裏さびしきひととこ

吉野紙

宮内とし子

冬に入る地下一坪の合鍵屋
覗きこむ顔の大きく福寿草
冬うらら棹立て休む手漕舟
雪女十戸の村を離れざる
雪もよひ筆のためらふ吉野紙

浮彫

大川ゆかり

石鹼に花の浮彫雪もよひ
ペリカンのくちばし冬日溜めてをり
冬薔薇のかをり微熱のあるごとく
木枯や体温計の銀のすぢ
冬木見上ぐる何といふわけも無く



入選一位 竹でつばう 内山花葉

花野から花野へ木橋渡りけり
魚霊碑の供華は野の花露しぐれ
いつの間に枯れて繋がる烏瓜
新藁の匂ひに噎せて猫車
谷地の稲架みじかし日差しふつくらと
山里の日の濃きところ蕎麦を干す
地粉碾く石臼据ゑて紅葉茶屋
いま摘みし青柚で嬰をあやしけり
栗落すラジオ大きくしてゐたり



感想

沖人会四年目、コンクール
初挑戦を心に決めておりまし
たところ、四五〇号記念俳句
コンクールを実施とのこと。
一層、積極的に参加したいと
思いながら、さて何を詠める
のかと思案致しました。

ある日晩秋の袋田の滝を訪
ねました折、ゆつたりと流れ
る溪谷のほとりでもともと自分
がリラックスしていることに

《沖 450 号記念俳句コンクール》

冬蝶の恍惚と日にちから抜く
芋茎干すうすき山の日待みては
空あまり青くて滝の凍てられず
冬滝の一途といふはいさぎよく
吊り橋を来る耳付きの冬帽子
猪鍋を待つ炉の灰を均しつつ
剥製の目のてらてらと楯燃ゆる
荒星や蜜みつしりと冬りんご
高嶺村七戸に寒の明けにけり
熊よけの鈴降りてくる斑雪
あたたかや竹でつばうの試し打ち

気がつきました。晩秋から初冬にかけての季節が一年で最も好きな私はこの風景を詠んでみようととつさに決めました。

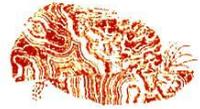
また私の住まいのつくばは田園地帯ですので好きな身辺風景と合わせて纏めました。素朴な風土の写生句ばかりで不安でしたが、私にとつては原風景のような句でございます。

入選一位のお知らせは本当にうれしく、夢のようです。

主宰、林翔先生はじめご選考下さいました委員の皆様にご心よりお礼申し上げます。

ありがとうございました。

沖作品



チャップリンの深おしぎふと枯はちす
ブレーキの音尖りたる十二月
懐手してビル街の小商ひ
冬木の芽女工哀史の峠越ゆ
風邪声をはみ出し歌ふ第九かな
寝袋にカフカの「変身」読む霜夜
冬ひでり椿の杖のかぼそくて
孤高なる握り拳に鷹を据え
レノン忌や日本の空は冬桜
聖誕祭ノアの動物ビスケット
炬燵して己が命のこぢんまり
自転車の磨き立てなる札納
史実とはボタンで餅を掲ぐことも
呼び鈴のサンタクロースへ受領印
医師の後よりラグビーの大葉缶

東京

藤原はる美

市川市

鳥居 秀雄

東京

齊藤 實

能村研三 選

咳といふ黙秘の術のありにけり
マンモスの牙に磯の香小六月
西海の大渦小渦十二月
冬ざれや地を踏み鳴らす野馬の群
クリスマス海を隔てた島の鐘
霜菊を括る凜然たる香り
枝張りの豊かに眩し冬櫛
般若面の怨念極む虎落笛
木の形の崩れず焰立つ大焚火
山の日の晴れて頭ちたる枯木かな
合掌の冷氣凜々初日出づ
子の家の煮豆ふつくら初明り
反り引いて初水揚の大鮪
目力の医師のマスクに向かひをり
凍滝の襞奥透きて時が透く

京都

七種 年男

京都

おかたかお

市川市

宮島 宏子

沖作品 15句選評

*
能村研三

チャップリンの深おじぎふと枯はちす

藤原はる美

チャップリンの映画を見ていてだれもの印象に残るのが、体を半分折り曲げて床に頭がつくほどおじぎするシーン。昔の映画なので白黒で画像も悪くフィルムの動きも今のものとは違う。それが却ってレトロっぽくて人気の秘密なのかも知れない。蓮田の枯れざまは何か壮絶なものを感ぜさせるが、水の溜れた蓮田で折れ曲った茎や枯葉、実が抜けて萎んだ花托など、残骸が散らかり衰れをとどめる。このころから蓮根掘りが始まる。見立ての俳句は思い切りがなくてはならないが、この句は他に類想もなく思い切りがよい。

孤高なる握り拳に鷹を据ゑ 鳥居 秀雄

市川の行徳に「諏訪流」を継承する正統派最後の鷹匠と呼ばれる花見さんという人がいた。私も鷹匠の演技は何度か見たこ

とがあるが、すばらしいものである。鷹匠は手袋をした左手拳に鷹を乗せ、腰の餌入れからすばやくハトの肉を取り出す。こうして手の上で餌を与え、人を恐れないように訓練する。この光景を鳥居さんはすばやく一句に捉えた。鷹匠の持つ深い技に感銘しその心意気まで詠みこんだ一句である。

自転車の磨き立てなる札納 齊藤 實

物が豊富な時代になったためか、自転車の手入れをしたり磨いたりということ余りしなくなりました。自転車はタイヤのリムやスポークの掃除が一番大変で、スポークの一本、本を拭き汚れをとる。ここが光っていると自転車も新品に見える。これも年用意の一つなのか、きれいになったピカピカの自転車、近くの産土神社にお札を納めに行くことにした。新年を迎える素直な心持が描かれた一句である。

咳といふ黙秘の術のありにけり 七種 年男

たまたま風邪をひいて咳込んだのか、それとも全くの嘘の咳なのかわからないが、いずれにせよ会話の中でしっかりと自分の意見を述べたくない場面であったのだろう。咳を理由に明解な回答を拒否してしまっただのだ。これもいろいろなことにフアジーな日本人らしい対応の一つなのかも知れない。

木の形の崩れず焔立つ大焚火 おかたかお

ななかまどや水槽など焚火をしても燃えにくい木がある。火の勢いが強くなって万遍なく炎がまわりはじめても、中々木の枝の形を崩すことがない。自然の力の大きさを感ずる瞬間でもある。(以下略)